

ICT を取り入れた教育方法の現状と展望(1)

英語、音楽、教育実習の科目間の横断的検討

堀内 夕子

川畑 尚子

山本 淳子

はじめに

本学では 2023 年度より従来の教育課程である幼児教育学科こども学コースに加えて教育テックコースが開設されることに先駆けて、どのようなコースを創造していくのか検討が重ねられている。第 1 筆者の「英語 1」「英語 2」担当准教授、第 2 筆者の「音楽 1」「音楽 2」^{注 1} 担当准教授、第 3 筆者の「観察実習」「教育実習(幼稚園)」の担当教授は、それぞれの科目担当の立場から、授業方法としての ICT の活用について、現状や展望について、数回の自主研究会を開き情報交換を行った。

教育方法としての各授業での ICT の導入については、2020 年度から続くコロナ感染症流行の影響でそれまでは完全対面形式だった授業が、政府の緊急事態宣言時は紙資料の郵送や非同時のオンデマンド方式、同時の Zoom 会議システム、E ラーニング(Moodle)システム、メール機能の利用等による全面遠隔授業が行われた。その後、本学では大阪府の指標に合わせて、対面授業と遠隔授業が組み合わせられたハイブリッド式の時間割りによる分散登校等、感染予防に配慮した ICT を利用した授業形態が加速度的に導入された。2022 年度の現在では本学の各学年の学生数が 100 人を切る少人数であるために、幸いにも密を避けられる環境にある。対面授業を基本に、コロナ感染症濃厚接触者の対面での受講が不可能な場合、同時双方向配信により遠隔受講できるハイブリッド型の授業形態も取り入れられている。このような状況の中で各教員は、教育目的(カリキュラムポリシー)をふまえながら学生が教育目標(ディプロマポリシー)を達成できるように教授活動を行っており、本学が示す学習成果の獲得をいかに保証するか日々模索している。

本論文をまとめるにあたり、我が国における学校教育の情報化について、その定義および基本的な考え方について確認する。「ICT」という用語は「Information and Communication Technology」の略語であり、教育分野においては「情報技術」と訳される(堀川 2014)¹。また、文部科学省「教育の情報化に関する手引き」(2010)では ICT

の定義は「コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報コミュニケーション技術のこと」²と記される。柳（2006）³は「具体的には教育現場で使われるコンピュータ、CD/DVD プレーヤー、プロジェクター、電子黒板などの教育機器とインターネットや Wifi などを組み合わせたシステムを指している。従来は CALL 教室（あるいはさらにそれ以前の LL 教室）がその集大成として言及されていたが、現在では、いわゆるスマートフォンやタブレット PC など学習者が所持しているモバイル機器を教室に持ち込んで学習を進めるモバイル学習が注目されるなど変化が著しい」と述べている。

1. 「英語」科の ICT 活用の授業方法の現状

外国語教育と ICT の親和性は非常に高く、古くは昭和 33 年に告示された学習指導要領に「レコードや蓄音機の活用」と記されている。ネイティブ・スピーカーが現在ほど各学校に配置されていない状況において、音声を聞く環境整備は外国語教育の推進に当たり、欠くことのできないものであった。時代は変わり、多くの学校に LL 教室が配備されてきた。こうした音声機器は ICT 技術がさらに進歩した現在、タブレット等に形を変え、その可能性は飛躍的に広がっている。例えば「英語の授業を英語で行う」ために映像を使う授業における ICT 活用、パフォーマンス評価への ICT の活用、教室を飛び越え、世界とつながるための ICT 活用などである。全国では、その親和性、特性を生かしたいろいろな実践が行われている（文部科学省 2020, p.4）⁴。

①「ディクテーション」(Dictation) トレーニング

第 1 筆者の英語の授業は情報処理機器演習室で行っている。「ディクテーション」(Dictation) トレーニングとは、聞こえてくる音声を一語一句書き取るトレーニングである。音源はパソコンにダウンロードしており、学生はヘッドフォンを装着し、自分のペースで何度も繰り返し聞き、その後答え合わせを行う。コロナ禍以前は学生を順番に当て声を出して回答させていたが、大きな声を出すことが懸念される中、答え合わせは Zoom の共有画面やチャット機能を利用している。学生らの中にパソコンのブラインドタッチができる者はほぼいないため少々時間はかかるが、パソコンへの文字入力技術は社会人として実務に必要である。

②オンライン辞書の使用

英文の答え合わせが終了したら無料のオンライン辞書を用いて日本語に翻訳する作業を行う。オンライン辞書の最大の魅力はすぐに検索できることである。該当する単語を入力するだけで単語の意味や例文を見つけることができる。発音機能もありネイティブ・ス

ピーカーが読み上げる発音を学ぶこともできる。学生には、単語や熟語の単位で検索しなければおかしい翻訳になるという説明を加える。授業内では英語に限らず、訳した日本語の意味が分からないという場面によく出くわす。分からないことをインターネットで検索し、答えを得る授業は「ICT を使って調べる能力」を培うことが期待される。

例えば“sundeck”は「上甲板」であるが、学生には馴染みのない言葉である。そういった場合は学生に「上甲板」の画像を検索させると同時に説明を加え、全員で一緒に理解を深める。

③You Tube や英語学習アプリの活用

授業では本来のテキストとは別に You Tube や英語学習アプリを利用したアクティビティを 3 週間に一度 20 分程度行っている。学生の英語への関心やモチベーション向上を目的としている。You Tube ではバイリンガルの人気ユーチューバーの動画を見ながら海外の暮らしを見て視野を広げたり、動画内で出てくる単語や熟語を学んだりする。また、流行りの英語の曲の動画を見て単語や熟語はもちろんのこと歌詞から分かる異文化について話をしたりする。You Tube は既製品であるが配布プリントは第 1 筆者のオリジナルで、学生と一緒に考えたいことや学んでほしいことを内容に含めて作成している。

その他、無料英語学習スタディーアプリを用いる場合、例えば「発音博士」というアプリは発音を音素単位で細かく分解し、一人ひとりの弱点を正確に視覚化してくれるため、どこを間違って発音しているのか非常にわかりやすい。また、結果は単語ごとに点数として評価されるため、ゲーム感覚で挑戦ができて楽しく盛り上がる。

動画を使った無料外国語学習サイト“English Central”では自分のレベルや興味に合った動画を視聴して知らない単語にマークを付けたり、動画のセリフ内の空白を埋めて新しい単語を学習したり、セリフを音読してすぐに発音と流ちょうさの評価を受け取ったり、講師と 2 回マンツーマンレッスンで英会話レッスンを受けることができる。後者二つについてはマイクとカメラの機能が教室に整備されていないため、授業内で行うことはできなかったが、当日の学生の感想は「ボタンを押すと分からない単語がすぐ分かるので良かった」、「自分のレベルや好みで動画を選択できるところが良かった」など好評であった。

④Zoom のチャット機能を利用した振り返り

毎回の授業では授業の振り返りの時間を設けている。Zoom のチャット機能を利用し、学生は授業で何を学んだか、感想、質問を入力する。3 週間に一度のアクティビティの日の学生の感想には、「楽しかった」「またやりたい」という言葉が大変多く見られる。学習する際に文字だけではなく、視聴覚+その単語や熟語が利用される場面が加わることに

り理解がより深まるとともに記憶に残りやすいと考えられる。

課題として、設備面では本学のコンピュータ教室はヘッドフォンで音声を聴くことは可能であるが、学生用のパソコンにマイクとカメラがなくハード面での設備が整っていないことから授業方法に制限がかかる。授業中にネット障害などが起こった場合は授業内容を変更せざるを得ない。実際に他校でオンラインテキストを利用している最中に、テキストの出版社がメンテナンスを行ったり、学内で通信障害が発生したりして、授業が妨げられるということがあった。このような事態が起こりえることも視野に入れて授業を進めなければならない。

2. 「音楽」科目のICT活用の現状

①「音楽1」「音楽2」授業説明

第2筆者が担当する「音楽1」「音楽2」の授業について説明する。本学では「音楽1」は第1 Semester、「音楽2」は第2 Semesterに配置されている科目である。子どもの遊びを豊かに展開するための表現技術として、ピアノの演奏技術習得を目的としている授業で、使用テキストのバイエル教本、本学指定「PIANO MUSIC」、ソナチネ、ソナタからそれぞれの力に応じた楽曲を選び、演奏力の向上を目指している。また、保育の現場でよく歌われている「おはよう」「おべんとう」「おかえり」を弾き歌いし、実践力をつけている。授業は個人指導で、学生ひとりひとりの学習経験に合わせて指導しており、一人が指導を受けている間、他の学生は聴講または付属練習室で練習し交代しながら行っている。非常勤講師を含めた11人の教員が担当しており、基本的に1教員は1年間同じ学生を担当している。

②「音楽1」「音楽2」のICT活用について

これまで、「音楽1」「音楽2」の対面授業においては、ICTは活用しておらず、筆者は冒頭で説明した自主研究会で情報交換するまでは「音楽1」「音楽2」にICTの親和性は“無い”と考えていた。しかし、自主研究会で先述の英語授業でのICT活用の方法を共有する中で、学生はピアノを練習する際にすでにICTを活用しているのではないかという意見が出された。また研究会ではピアノ学習経験の浅く、苦手意識のある学生は、ICTを活用することで、楽しく学ぶことができるかもしれない等の意見もあり、まず実態調査として、「音楽1」「音楽2」を受講している一年生にICTを利用しているかアンケート調査を行うことにした。

3. 「教育実習」系科目のICT活用の現状

①教育実習系科目のカリキュラムツリーの位置づけ

第3筆者が担当する「観察実習」は本学では第1 Semester、「教育実習(幼稚園)」は第2 Semesterから第3 Semesterにおいて配置されている科目である。上記2科目との関係は「OCC カリキュラムツリー2022」では〈教養・基礎の学び〉のカテゴリーの「英語1」(第1 Semester)、「英語2」(第2 Semester)、〈専門の学び〉のカテゴリーの「音楽1」(第1 Semester)、「音楽2」(第2 Semester)のカテゴリーに紐づく〈実践の学び〉のカテゴリーに位置する。学校現場での実習として位置する科目であり、保育士課程である保育実習と共に〈教養・基礎の学び〉〈専門の学び〉の総まとめの科目でもある。

文部科学省の示す教職課程コアカリキュラムでは、「領域及び保育内容の指導法」に関する科目については「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」とモデルカリキュラムが示され、情報機器の活用は保育内容の指導法として活用することが含まれる。つまり「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」に関わる5領域の保育内容の指導法では、情報機器の活用は幼稚園教諭免許状取得のために身に付けなければならない必須事項である⁵と位置付けられている。一方「保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について」⁶においては直接的に情報機器の活用に関する記述が見当たらないが、3歳以上の幼児教育の文脈では幼稚園教育要領と保育所保育指針は保育内容の整合性が保たれていることから、保育者養成全般として情報機器の活用の技能は保育内容を実践する上で身に付けるべきこととして捉えるべきであろう。

②幼児教育現場におけるICT活用の事例から見る本学の保育者養成の課題

文部科学省では社会の国際化、情報化、人工知能化、多元文化社会を見越して幼児教育の実践支援、子どもの個性重視や主体性の尊重、幼児理解の検証などのために幼児教育のICTの活用を推進している⁷。文部科学省における令和3年度「幼児教育の教区課題に対応した指導方法など充実調査研究」のテーマのうちICTに関しては「幼児教育におけるICTの活用(リーフレット)」「幼児の体験を豊かにするICT実践事例集(リーフレット)」

「ICT活用による保育内容の充実と園内外での共有に関する調査研究」などが発行されている。実践事例集ではタブレット、プロジェクターを利用したプラネタリウム投影、デジタル顕微鏡の使用による虫の観察、ビデオ会議システムの活用による遠隔でのやり取り、動植物のタブレット撮影、プロジェクトやスクリーン活用の影絵、音楽作成アプリによる効果音づくり、動画作成物語づくりなどの幼児の活動が紹介されている⁸。

実習配属園では、まだすべてではないが保育者が指導計画をワードやエクセルで作成する。教諭の勤怠管理、子どもの出欠管理を行うアプリを取り入れる園がある。子どもの教材として、テレビの視聴、書画カメラやCDラジカセ、カメラ、ビデオ撮影機器の使用は長年行われている。それに加えて、近年は保育実践でのタブレットの使用、動画の編集と

活用、図鑑アプリの使用などもなされている。また、積極的に教育機器を使用するというよりも、実体験を最重要視している園が多くある。しかしながら、今後、特に小学校以上の学校教育では ICT 活用能力の育成が期待されるのであり、幼児教育と小学校教育の接続の視点でも、保育現場の ICT 活用を視野に入れた保育者養成が求められる。

問題の所在

第 1 筆者、第 2 筆者、第 3 筆者担当のどの科目も 1 年生科目で、入学直後の学生の学びを支えるものであるという共通点があり、初年次の学びとして各担当科目の授業内でできることも本研究において検討していきたい点である。また、「英語 1」「英語 2」では外国語を学ぶことを通してグローバルな文化に触れることや意識の醸成、会話体験や能力を身に付けることが授業の目的となり、「音楽 1」「音楽 2」に関しても主にピアノ技術の取得と共に、学生自身が歌や音楽を楽しみ、保育のいろいろな場面でピアノを活用することが目指される。実習系の科目については、教養科目や専門科目の学びを総合した保育者としての実践力等の専門性の育成が目指される。これらの科目の修得によって学生自身が成長し、子どもの経験を豊かにできるような保育者を目指し、実習に取り組むことを願うところである。

英語、音楽、教育実習系科目(以下、この三科目を指す場合を当該科目と記す)について ICT の活用の現状を検討した際、科目親和性の視点では英語教育は従来からの教育方法として ICT の活用がなされていた。また昨今の感染症流行の対策の事情から音楽系科目や教育実習系科目でも急速に導入された経緯がある。そのことをふまえて、本研究では該科目の ICT の活用について、問題の所在を以下の 3 項目として捉え、研究目的を設定した。

- ・入学直後の 1 年生を受け持つ立場から、ICT の活用について初年次教育特有の指導の押さえどころがあるのではないか。
- ・本学では ICT 活用をテーマに、科目間での情報交換による教育効果の検討はあまりなされていない。科目間の横断的な検討から ICT の活用について教育方法・内容などの新たな展望が見出されるのではないか。
- ・感染症流行などの昨今の状況から、教育方法の ICT の活用について、改めて科目での学びに有効に位置づける必要があるのではないか。教育資源としての施設面の整備・更新が必要ではないか。

研究の目的と方法

当該科目の ICT を取り入れた各教員の指導方法、授業実態を検証し、学生がディプロマ

ポリシーに向かう能力を身に付けるために、課題をあぶりだし、科目における ICT 活用の展望を横断的な視点で探ることを研究目的とする。

研究方法として当該科目の ICT 機器使用の実際の指導方法の実践をまとめ、実態を検証する。現時点で ICT 機器活用の割合の少ないと思われる英語以外の音楽、教育実習系科目については、質問紙法によって学生アンケートを行い、授業関連の ICT の活用実態について把握する。さらに学生がディプロマポリシーに向かう能力を身に付けるための課題をあぶりだし、今度の ICT の活用の授業方法についての展望を考察する。

1. 調査方法

①音楽の調査方法

ピアノを学ぶ(練習する)時、学生が ICT を利用しているかを知るため、2022 年 7 月「音楽 1」「音楽 2」を受講している本学 1 年生に質問紙調査を行った。質問用紙は各クラスの授業終わりに配り、その場で回収した。質問項目は主に①ピアノを学ぶ(練習する)際に ICT を活用したことがあるか。②どんな ICT を使ったか。③アプリをダウンロードしてピアノの弾き方等学んだことがあるか。④ICT を使うことについての自由記述である。

②教育実習系科目の調査方法

「観察実習」「教育実習(幼稚園)」の幼稚園実習に関する授業受講に際しての ICT の活用実態を把握することを目的として質問紙法により以下の項目①本授業を学ぶ(練習する)際の ICT の活用の有無、②ICT 活用の種類(Zoom や LINE、You Tube、DVD、CD 利用、エクセルやワード、パワーポイント等のオフィスソフトを利用、その他のアプリ利用、その他より選択式で回答、③②マイクロソフトオフィスソフトでは何を利用したか、④前出以外にどのようなアプリを利用したか、⑤ICT の利用について利点や失敗談などの自由記述、⑥教育実習での ICT の利用や活用についての希望や見通し、また子どもの保育内容の視点からの思い等について質問しアンケートの集計を行った。自由記述については文字テキストについて定性的コーディングを行い、類似テーマについて概念カテゴリー(コード)を割り当てた⁹⁾。

③倫理的配慮

なお本アンケートは第 1 筆者、第 2 筆者、第 3 筆者との共同研究であること、本学の紀要論文、学会発表などの使用目的、回答者は無記名のため特定されない事、記載しなくてよい権利があることなどを説明の上、回答を求めた。

結果

1. 音楽

有効回答数 75、有効回答率 100%であった。

ピアノを学ぶ（練習する）際に ICT を活用したことがあるかという質問に対し、75 人中 58 人（77%）の学生が使ったことがあると回答し（表 1）、その内 55 名が「YouTube や DVD,CD で音楽を聴く」を選択した（表 2）。

表 2「Zoom や LINE を使ったオンラインレッスンを受ける」については、新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者となり来校できない学生に対し、本人の希望を聞いてオンラインで授業を行っているため、経験した学生が少数いたと思われる。また「その他」の 3 人は全員メトロノームアプリを使っていると記述があった。

自由記述のテキストデータは KHCoder 3¹⁰ を用いた計量テキスト分析を行った。使用されている語の出現頻度および共起ネットワークを用いて分析する。ICT を使うことの自由記述について、ICT とは直接関係がないと思われる「私」「思う」を省き、さらに「you」「tube」を「YouTube」に統一し、テキストマイニングを行った。総抽出語数 1333、異なり語数は 292 であった。抽出語は出現頻度の高い順に「分かる」(21)「リズム」(17)「ピアノ」(16)「使う」(15)「YouTube」(13)「良い」(13)と続いた。その後、自由記述のデータを基に共起ネットワークを作成した（表 3）。その結果、8 つのサブグラフに分かれた。サブグラフ検出による語・コードのグループ分けは、あくまで機械的な基準でグループ分けした結果であるが、①②は主にオンラインでピアノ指導（レッスン）を受ける時のことについて、③④⑥は ICT(YouTube)を使う理由や効果についてまとめられていると考える。細かく見ると③は「楽譜だけでは分からない時に、参考にしている」④は「調べるとリズムが分かる」⑥は「練習の時に良い」など、学生は自宅での練習時にリズム、テンポを知るために ICT を活用し、特に YouTube は身近に使用していることが示唆された。

表 1 ピアノを学ぶ際に ICT を活用したことがありますか？

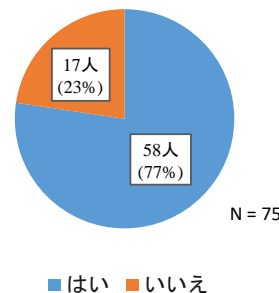


表 2 ピアノを学ぶ（練習する）際にどんな ICT を使いましたか？（複数回答可）

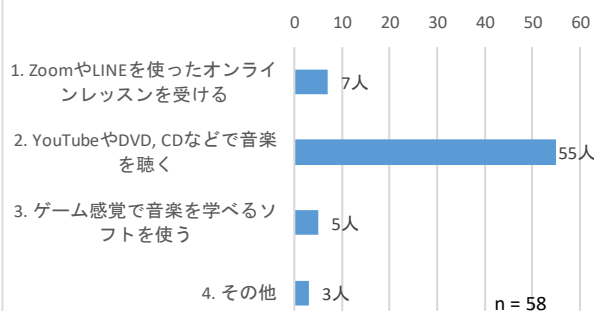
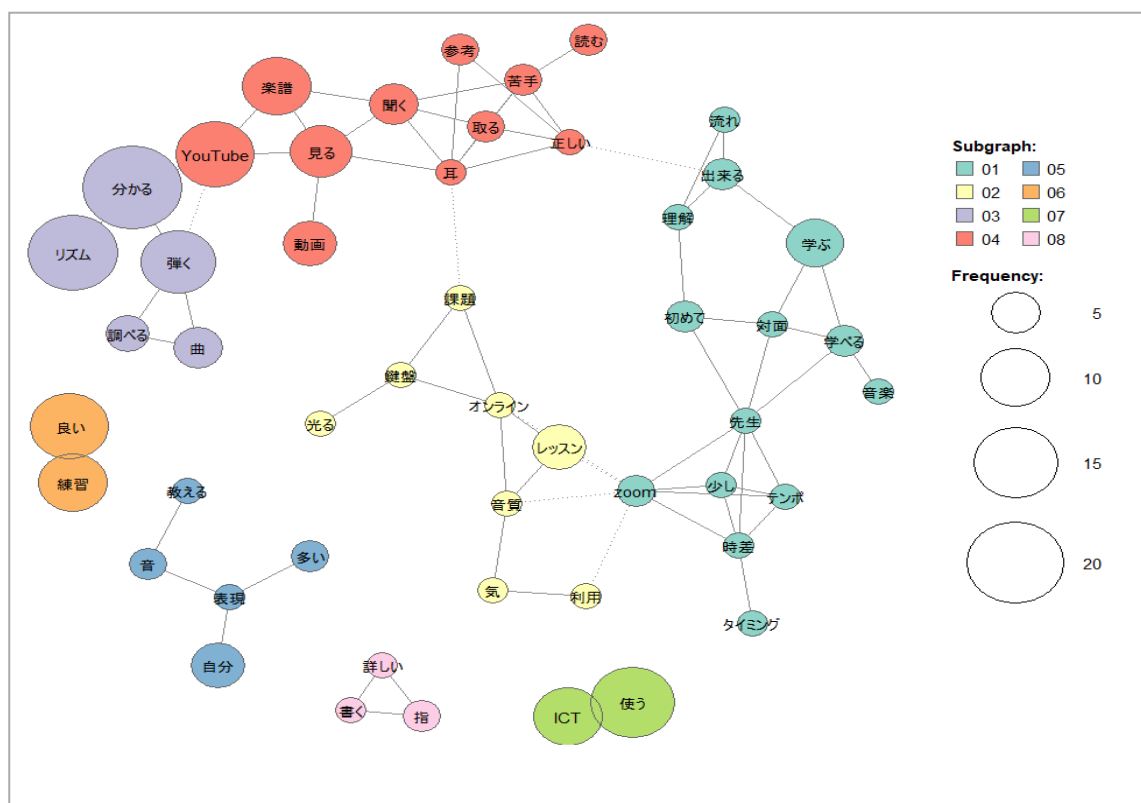


表3 ピアノを練習する時に ICT を使うことについての共起ネットワーク



今回のアンケートから、「音楽1」「音楽2」に ICT の親和性が“有る”ことが分かった。対面授業では ICT を活用していないものの、学生は家でピアノの練習をする時に楽譜を見て分からないリズムや曲の速さ（テンポ）など YouTube 等を聴いて参考にしており、メトロノームアプリを使うなど、日常的に ICT を活用していることが明らかになった。

2. 教育実習系科目

1 年前期に「観察実習」を受講し、後期に「教育実習」を受講した 1 年生のうち、当日出席者の学生 75 名がアンケートの対象者である。有効回答数 74(未記入 1)、有効回答率はほぼ 99%であった。自由記述のテキストデータは 50 の記述があり、学生の誤字・脱字は第三筆者が修正して一覧表に示している。

表 4「教育実習系の授業での ICT 活用」は質問 1、本授業を学ぶ（練習する）際に ICT を活用したことがあるか、についての回答である。活用しない学生は 20 パーセントと一定数存在する。

表4. 教育実習系の授業でのICT活用

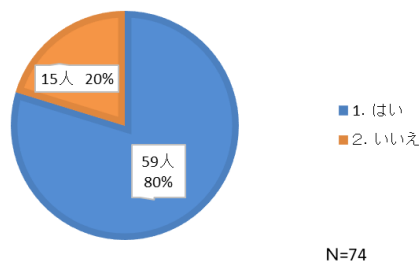


表5. どんなICTを使ったか(実数・複数回答)

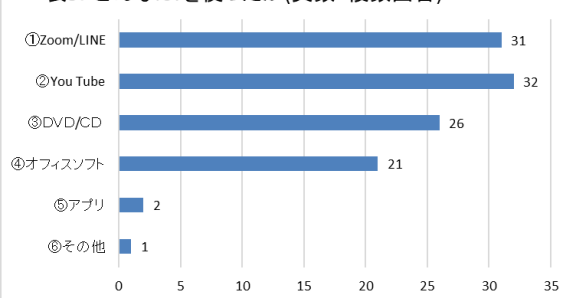


表5「どんなICTを使ったか(実数・複数答)」は質問2において質問1で「はい」と答えた59人の学生を対象に何を使ったかについて問い、それについて複数回答で答えている。

コロナ禍でZoonを利用した授業や、LINEなどコミュニケーション手段としてのソーシャルネットワークサービス(以下SNSと記す)の利用がそれぞれ半数程度ある。YouTubeの他、DVDやCDなどの動画や音源の活用もされている。自由記述によると視聴によってリアル感を感じたり、歌、手遊びを調べたりすることに活用している。

表6. Microsoftofficeソフトの利用(実数・複数回答)

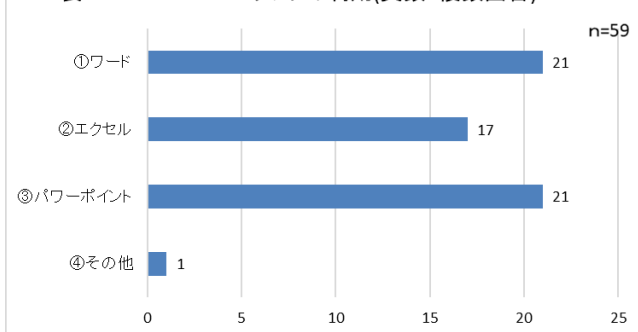


表6「Microsoft office ソフトの利用(実数・複数回答)」は質問2の④を受けて、質問3としてマイクロソフトオフィスのソフトの何を使用したかを尋ねた結果である。ワード、パワーポイント、エクセルを主に使用しているが、アンケートの有効回答数からすると、約3分の1程度の学生が使用する程度で、割合はそう高くないといえるだろう。またその他の回答として、教員がそれらを授業で使っているという記述であった。自分が主体に使用しているわけではないが、授業を受けることで利用しているという意味合いと捉えて、アンケートに回答している場合もあることが示唆される。質問4では表5⑤を選んだその他のアプリは何かと問うているが、学校で推奨する健康・体温管理アプリとの記述が見られた。

質問5ではICTの利用について、利点や失敗談の自由記述を求めた。記述内容を表7「自由記述 失敗談(ネガティブな意見)」、表8「自由記述 利点(ポジティブな意見)」にまとめ、さらに同じような内容を分類し項目名を決めてコード化した。ネガティブな意見では「接続問題」「操作ミス」「操作不慣れ」「情報リテラシー」「互換性問題」が取りあげられ、ポジティブな意見では「利便性」「テスト対策」「調べ学習」「リアル感」「共有作業」「遠隔授業」等の利点を挙げている。

表7. 自由記述 失敗談(ネガティブな意見)

コード	質問5の自由記述(ネガティブな意見)
接続問題	ズームがうまく接続できず時間がかかった。
	接続状況が悪い。
	ネット環境が悪く、つながりにくかったことがある。
	Zoomがなかなかつながらない。
	Zoomになかなか入れない人がいて授業に遅れが出た。
	Zoomで授業を受けたときに音声が入らなかった利したので少し失敗したなと思いました。
	ネットワーク環境が悪いと通信が途切れたり、聞きづらいなどがある。
操作ミス	データが飛んだり設定がめんどくさい。
	がんばって作ったパワーポイントが保存できていなくてデータが消えたことがある。
	操作をしている途中で別の画面に飛んでしまい、データが消えた。
	保存し忘れ。
操作不慣れ	パソコンに慣れていないので使い方が難しい。
	使い方を覚えないと少し難しい。
	やり方がわからなくてICTが嫌いになります。
	ワードやパワポの細かい操作が難しく、思うように進められないときがある。
情報リテラシー問題	正しくない情報にだまされてしまった。
	誤った情報が載っていた。
	間違った情報を取り入れてしまう。
互換性問題	スマホで利用すると、メールなどにファイルを添付するときに拡張子が外れる。(ファイルが開けなくなる)

表8. 自由記述 利点(ポジティブな意見)

コード	質問5の自由記述(ポジティブな意見)
利便性	使いこなせれば便利だし、パソコンで管理できる。
書くことの利便性	紙の資源削減になる。間違えても訂正しやすい。
	コピー書き直ししやすい。
	書く手間が省くことが出来るため楽である。
テスト対策	Youtubeなどで単語をある音源に乗せ、歌っているものがあり、テスト勉強に役立った。
調べ学習	どこでも調べればすぐに出てくる。
	すぐに調べることが出来る。
	調べたらたくさん参考になる遊びや歌がでてくる。
	手遊びなど簡単に調べられる。
リアル感	DVDなどで、より保育現場をリアルに感じることが出来る。
	DVDやCDなどを利用することで様々な場面の対策、予防が出来、とても便利だと感じた。
	様々な場面が取り上げられ、それに対応した保育者の動きが見てわかる。そのことから、参加実習ですぐに対応できたことがあった。見てわかるので覚えやすく、すぐに対応に生かすことが出来た。
	手遊びの仕方や素話の話し方など学ぶことが出来る。
共有作業	一つのことを一回で大勢の人に共有できる。
	グループでの提出の際、パワポを共有しながら全員でレジュメを作ることが出来る。
遠隔授業	ZOOMを使用することで、離れていても講義を受けることが出来る
	遠く離れた場所や外に出られない事情のときに授業を受けることが出来る。
	濃厚接触者になっても授業を受けられる。

表9「自由記述 教育実習において ICT の利用や活用についての希望や見通し」はアンケート問6で教育実習での ICT の利用や活用について実習生としての希望や見通し、子どもの保育内容の視点からの思い等の自由記述を求めたものである。学生は ICT の活用によって教育実習での備えができる「保育技術向上のツール」として活用したり、「仕事効率化」への展望を持ったり、さらに保育現場での ICT 機器活用による保育方法、保育内容の提案が見られる。また、教員の活用方法に対する批判や自身の ICT 活用技能の不安の訴えも見られる。

表9. 自由記述 教育実習でのICTの利用や活用についての希望や見通し

コード	質問6 自由記述(展望など)
保育技術向上のツール	指導案の書き方などを何度でも再生できるYouTubeにのせてもらいたいです。
	まだ現場での子どもの様子をあまり知らないので、動画を見て月齢ごとの細かい発達の違いを見られたらよいと思う。
	ピアノの練習のときYouTubeで検索しし、聞いたり、手遊びを見たりして、役立てています。
保育方法・内容の展望	保育現場で実際に使われている子供用のタブレットやカメラを授業内で操作してみたいです。
	スクリーンなどを使用できたら後ろで見えにくい子どもが少なくなり皆で楽しむことが出来るのではないかと考えた。
	映像を見る英語に触れるときはICT を使ったらよいのではないかと思います。
	子どもが描いた絵をスキャンして、画面で動くようにするなどICTを利用するとより多くの楽しみが発見できると思う。
	今の子ども達は将来必ずICTを使うから、早いうちから嫌いにならないよう楽しく使えたらいいなと思います。
仕事効率化	小学校に行ったらICTを使う場面があると思うので、少しでも何か取り入れられたらいいなと思う。
	ICTの利用で保育者の仕事を効率よく出来たらなと思います。
普及	もっと普及していくと利点はいっぱいあると思う。
ネガティブ意見	先生がひたすら話しそれを聞き、メモをするのみの受身の授業ならZOOMで授業をすべき。きりたんの先生のパワポは見づらい。
	上手く使いこなせるが不安である。

総じて「観察実習」「教育実習(幼稚園)」の幼稚園実習に関する授業受講に際しての ICT の活用についてのアンケート調査では、授業で ICT を活用していないと答える学生が 20%いるということ、活用している学生は SNS、授業に関する調べ学習、動画を利用した演習などの活用が伺えた。また自分で活用する学生はオフィスソフト「ワード」の利用や、グループで共有については利便性を感じている。ネガティブな記述からは、ネット環境の接続問題、操作について的人為的ミス、不慣れによる ICT の毛嫌い傾向が見られる記述も見受けられた。また情報リテラシーについても言及している学生があった。教員による活用については、現場のリアル感を伝えるツールとして評価されるが、批判からは、学生にとって最適な学習ツールとなっていることが求められている。また、教育実習での活用や

見通しは、今後保育現場においてタブレット、カメラ、スクリーン、などの教材としての機器類の活用がなされるだろうことの認識があること、それを使用するという展望を持つ学生が少なからず存在することである。また保育技術向上や仕事効率化のツールとしての取入れに期待する姿が見られた。

総合考察

本研究に当たり、当該科目の教育内容は学科レベルでとらえたときにディプロマポリシー及び学習成果その能力が達成されることを目指されるかを表 10. 「当該科目の目指すディプロマポリシーと学習成果の一覧」に整理した。「英語 1」「英語 2」は DP 2 の②③、DP 3 の③、「音楽 1」「音楽 2」は DP 1 の②③、「観察実習」は DP 1 の③、DP 3 の②③、「教育実習」は DP 2 の①、3 の②③の主なる学習成果の獲得が目標される。総じて当該科目によって 3 つのディプロマポリシーは実現できる。

表. 10 当該科目の目指すディプロマポリシーと学習成果の一覧

ディプロマポリシー		当該科目の主に目指す学習成果の項目				総合
		英語 1 英語 2	音楽 1 音楽 2	観察実習	教育実習	
DP1 (知識・理解)	幅広い教養や、幼児教育・保育に関する専門的な知識・技能を習得し、子どもを理解することができる。		②③	③		②③
DP 2 (思考力・判断力・表現力)	社会の課題を見つけ、自ら考え伝え 合い、問題解決を行うことができる。	②③			①	①②③
DP 3 (主体性・多様性・協働性)	人権意識や倫理観を持ち、社会の一 員として行動し、多様な他者と協調 して社会に貢献できる	③		②③	②③	②③

表より当該科目の学習成果の番号を総合して確認しておくこと当該科目履修によって以下の学習成果の達成が目標される。

- ・ DP 1 の学習成果では②教育学・保育学の専門的な知識・技能を習得し、体系的に理解することができる。③乳幼児期から児童期の子どもの発達過程を理解している。

- ・ DP 2 の学習成果として①子どもや社会に関わる課題を発見し、問題解決に向けて取り組むことができる。②日本語と外国語を用いてコミュニケーションをする力を身に付けている。③ICT を用いて情報を収集分析し、モラルに則って効果的に活用することができる。

- ・ DP 3 の学習成果として②保育実践技術を活用し、自己の活動を総合的に評価することができる。③社会の一員として人権意識や倫理観を持つ、

の以上である。特に DP 2 の③ICT を用いて情報を収集分析し、モラルに則って効果的に活用することができる、については、本研究に関わる当該科目のうち「英語」のみが取り上げている項目であったが、担当教員の授業実践の報告によってもそれが伺えた。

「音楽」と「教育実習」系科目のアンケートでは、回答は 1 年生が対象であり、学生生活に慣れた前期後半、後期開始頃ではあるが、ICT の活用については SNS などの活用は

あるものの、オフィスソフトなどが積極的に使用されているというわけではない。また、操作について、苦手感のある学生が見受けられた。これらのことから、科目で例えば Zoom の利用、オフィスソフトの利用や操作などについての不慣れ等の初年次特有の不安があることが伺える。学習成果として科目として取り上げていなくても学校としての学習成果の獲得の目標になっていることを再認識して各科目の担当教員による学生に対する丁寧なサポートは必須である。

教育効果の問題でいうと、英語の授業においては前項でも述べたように、パソコン教室にマイク機能を備え付けていないため ICT を使った会話や、英語学習アプリ内での発音チェックができない。そのため、活動が限られることがあるため早急な改善が求められる。改めて教員と学生が ICT 機器をコミュニケーションツールとして、双方向で活用しているということを意識し、学生自身がより良い教育効果を得ることができるように教育資源として ICT 環境の施設面の整備、更新が必要である。

英語の授業実践や教育実習系の授業学生アンケートから、ICT 設備の更新と使用の安定性は教育の質の担保に欠かせないものであるとの気づきにつながった。また当該科目に限らず各科目の指導教員がツールとしての ICT を適正に使用することが学生の安定した受講態度につながるということも自由記述から捉えられることである。

当該科目の今回の研究では、ICT 活用のテーマに限らず、科目間で情報交換、教育方法・内容の連携事項の検討の少なさの課題があぶりだされた。しかし今回の教員間の情報共有の中で、「音楽」においては今後、学生が自宅での練習時に視聴できるように、授業テキストを教員が弾いている動画を限定で YouTube に置くなど ICT 教材の作成と活用方法も模索していきたい、と新しい教育方法の発想を得た。

今後さらに進化し高度化するであろう ICT の活用について、継続的に学生の使用知識や技能の教授による能力開発は継続的になされなければならないだろう。引き続き教員間の情報交換によって課題をあぶり出し解決していくことは学生の学習成果の教育の質に繋がるということも再認識したい。

今後の課題として研究の目的や問題の所在に示した「教育効果」の検討についてディプロマポリシーを目指した各科目の評価、アセスメントの方法の実態の検証までは言及できていない。これらについても ICT 技術を取り入れる等、学科全体での教員による取り組みが必要であり課題でもある。

注

1. 「音楽1」「音楽2」はピアノ演習科目である。(本文2①「音楽1」「音楽2」授業説明参照)

引用・参考文献

1. 堀川龍也「学校教育における情報化の動向と課題」『音楽教育実践ジャーナル』、vol. 11 no. 2 日本音楽教育学会、2014年、6頁-13頁。
2. 文部科学省「教育の情報化に関する手引き」、2010年。
3. 柳善和「外国語教育におけるICT利用活用の現状とこれからの展望」『名古屋学院大学、言語・文化篇』第28巻・第1号、2016年、9頁-19頁。
4. 文部科学省「外国語の指導におけるICTの活用について」、2020年。
https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_13.pdf
(参照 2022-05-29)
5. 文部科学省「教職課程コアカリキュラム」、2017年(平成29年)。
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf (参照 2022-10-30)
6. 一般社団法人全国保育士養成協議会「保育士養成課程等の見直しについて」(検討の整理) [報告書] 別添1 保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について。
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/betten1.pdf> (参照 2022-10-30)
7. 文部科学省「これからの幼児教育とICTの活用 ～幼児理解の深化と援助の充実へ～」。
https://www.mext.go.jp/content/20200525-mxt_youji-000004222_12.pdf
(参照 2022-10-30)
8. 文部科学省「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1405077_00007.htm
(参照 2022-10-30)
9. 佐藤郁也『質的データ分析法』新曜社、2008年、33-43頁。
10. 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析 (第2版)』ナカニシヤ出版、2020年。